



# 遠江・山と里の民俗

会報 第26号

## 西浦の田楽 関東圏の観衆を魅了

令和七年十月十二日、練馬区立練馬文化センターで、「第六十七回 関東ブロック民俗芸能大会」が開催されました。

この大会は、伝統的伝承活動の活性化や、民俗文化財への理解を深めるため、選ばされた団体が演舞を披露する機会や団体が出演し、その中に、西浦田楽保存会（天竜区水窪町）が参加。数多い「西浦田楽」の演目から『惣とめ（早乙女）』を披露しました。

この演目は二段に分かれ、最初は「花ザサラ」と称し、スリザサラを持った二人が、場を入れ替わりながら軽やかに舞います。次に「のたさま」の面をつけ注連縄をした者が舞い、ササラと太鼓が別当の詞章に合わせて舞う見ごたえのあるものです。

西浦田楽について「五穀豊穰や家内安全を祈願して夜通し奉納。世襲によって伝承されている点は現在では極めて珍しい特色」と紹介され、注目を集めました。

## 川名のひよんどり ステージ上で演舞

令和七年十二月七日、森町文化会館（周智郡森町）で、静岡県内で保存・継承されている民俗芸能を披露する「ふじのくに民俗芸能フェスティバル」が開かれました。掛塚屋台囃子や法多山の田遊びなど五団体の民俗芸能が披露され、浜松市からは「川名のひよんどり」（浜名区引佐町川名）が登場しました。

演目は五穀豊穰を願う「両稲むらの舞」。二本の大きな注連縄を両肩に掛け、香柴を持って暴れまわる、川名ひよんどり特有の舞です。

## マンガ&写真盛沢山 六百年の記念冊子発行

「川名のひよんどり保存会」は、六百年の節目を記念し、「川名ひよんどり六百年」という冊子を制作。浜松市内の小学校や図書館の他、ふじのくに民俗芸能フェスティバルの来場者にも配布しました。

手にした人は「川名の歴史や関わる人物について、マンガや写真を盛り込んだ解説が子どもたちにも分かりやすい」と大好評。保存会の次の世代への継承を願う強い気持ちが伝わってきました。



「川名ひよんどり六百年」

# 「志都呂神楽」の歴史と現在

志都呂獅子舞神楽保存会 山崎 清次

## 志都呂神楽の由緒

志都呂神楽は、元禄十一年（1698年）旗本五井松平家が下総より遠江に国替えになった時から始まります。遠州地方の領地二十三ヶ村を治める陣屋（代官所）を志都呂村に構えました。その際陣屋に門を建て、住民が魔よけの獅子舞神楽を舞ったとの話が残っています。ただし、この話は書類で残って居るものではなく口伝です。

五井松平家の発祥地は三河の五井村であり獅子舞神楽が盛んな所でありました。武家法度では門の修理等は幕府への届けが無くても良いとの事であったなどを含んで考えると、口伝も真実に近いと地元では考えられています。

最も古い記録は江戸時代末期の志都呂村庄屋の稲垣伝八郎の永代行事覚えによりま

す。万延元年（1860年）に殿様より時節柄、祭りの差し止めの命令が有るのに、隠れて神楽を催し代官所の役人に見つかり、村の若者七人をはじめ村役人が厳しいお叱りを受けたとの記録が残っています。この記録により獅子舞神楽を舞うのは産土神社の祭日であり、舞手も現在の志都呂東組の住人であり、現在でも江戸時代の形式を継承している事になります。

## 志都呂神楽の形態

志都呂神楽は三河の小坂井神楽や北遠の神楽舞と共通点が多くあります。舞手が女性の着物をつける事や舞の種類が複数有ることなどです。

また、伊勢の大神楽にも似ており、神楽の道具などを持ち運ぶ、神楽神輿（長持）の形

状や大きさも同じであり、門付で家々をお祓いして回る事などの共通点もあります。この様な形態によりルーツは伊勢の大神楽にあるのかとも思えます。

伊勢神楽では舞の間に曲が演じられていますが、志都呂神楽では曲の部分は無く、昭和初期までは舞の後に娯楽としての神楽芝居を演じていました。しかし現在では芝居は絶えてしまい、台詞だけが残っています。神楽芝居には忠臣蔵七段目・八百屋お七・金色夜叉などがありました。

## 志都呂神楽の現在

昭和四十五年頃に一時中断しましたが、五十年に有志住民により保存会が結成され活動が復活し現在に引き継がれています。現在では産土神社の八幡宮の祭日（十月中頃）の宵祭りの昼に、地域の秋葉灯籠や希望のお宅を門付けし回り、本祭りの夜には八幡宮に舞を奉納しています。その夜には大勢の住民が集まり、賑やかに舞を見守ります。

現在の保存会の会員は十五名程度で、会員の高齢化も進んでおり、将来に向かっての体制づくりが急がれています。令和五年に浜松市の地域遺産（認定文化財）に認定されました。現在の志都呂地区は住民が増え続けており、地域に新しく越してきた住民にも認定をきっかけに神楽舞の存在を認知してもらえよう努力しています。



志都呂神楽神輿(長持)



本祭り(夜)八幡宮奉納舞





旧勝坂小学校から出発



清水神社から八幡神社へ



# ありがとう！ 勝坂神楽

市指定無形民俗文化財

## 勝坂神楽 最終奉納

天竜区春野町でも最も北に位置する勝坂地区に、四〇〇有余年地域に守り継がれてきた民俗芸能「勝坂神楽」があります。

この勝坂地区には子授け・子育ての神として知られる八幡神社と清水神社が旧勝坂小学校を挟んで南北に鎮座しています。十月の最終日曜日に行われる両社の祭礼に際して舞われてきたのが「勝坂神楽」です。

令和七年十月二十六日の日曜日。今回で最後となる勝坂神楽が開催されました。当日は朝からあいにくの小雨模様でしたが、朝十時頃には氏子（勝勢社）の人たちに加え、十年前から地域と関わり勝坂神楽の継承活動にも関わってきたNPO法人わたぼうしグランドデザインの学生が旧勝坂小学校に集まり、最終の着付けを進めていました。開催時間が近づいたものの

小雨は止まず、伝統ある衣装などを濡らすこともできないため、通常通り行うのか旧校舎の中で舞を披露するのかどうかが悩まれていました。

旧校舎前で雨間をぬって神楽を始めようと移動すると、それまで降っていた雨が小雨になり、やがて雨は止みました。清水神社、八幡神社両社の神々が最後の勝坂神楽を無事に見届けようとしたのではと思われました。

その後、例年のしきたりに従って、両神社の神前で行われる「奉納神楽獅子舞」、両神社間に舞われる「道中舞」が粛々と進められました。

今回が最後の神楽の奉納ということ、例年にもまして多くの見学者が集まりました。地域の出身者、関係者は当然ですが、子供を授かったときにお参りし、無事出産のお礼に来たという春野町出身の御家族や掛川から一人で軽自動車走らせて来たという七十代の女性など、さまざまな人たちが最後の舞を見届けました。

八幡神社での舞が終わり、

保存会会長、自治会長、副市長、市議会議員、さらにNPO法人代表からそれぞれ感謝の気持ちが入められた挨拶がありました。

四百有余年という長い間、春野町でも山奥に位置する勝坂地区で守られ引き継がれてきた「勝坂神楽」。時代の流れとともに、いくつかなの変化を受け入れながらも地域の方々によって大切に受け継がれてきた「勝坂神楽」が、ここに一つの区切りを迎えることになりました。



舞子の笠には地域の方からのメッセージが書かれている



鈴木康夫保存会会長が  
出発前の参加者へ激励

### 民俗芸能の宝庫 地域の誇り

令和七年十月十九日、浜松市福祉交流センターで「三遠南信地域民俗芸能シンポジウム」が開催されました。天竜川・浜名湖地域十二市町村合併二十周年記念とあって、中野祐介浜松市長は挨拶の中で「平成の合併で浜松市は全国有数の民俗芸能の宝庫を誇る地域になった」と話されました。

第一部は「三遠南信の民俗芸能の現在と未来」をテーマにパネルディスカッション。小川直之國學院大學名誉教授をコーディネーターに、南信州民俗芸能継承推進協議会アドバイザー 國學院大學兼任講師の櫻井弘人さん、御園花祭保存会の荒河光弘さん、浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会の上嶋裕志さんが登壇しました。

ある。東三河では、「東京からの山村留学生がまつりをサポートし三十年になる」。遠州でも、学生や地元を離れた者がまつりに参加することで継承をサポートしている様子などが紹介されました。

第二部の民俗芸能鑑賞では、「遠州」「東三河」「南信州」から選ばれた芸能保存団体が、それぞれ国指定重要無形民俗文化財に指定されている芸能を披露し、来場者を魅了しました。

遠州を代表し「寺野のひよんどり」(浜名区引佐町澁川)が登場。披露したのは「剣の舞」と「獅子の舞」。獅子の舞では、左横に「まねき面」をつけた者と禰宜が獅子の両側に寄り添い、笛に合わせて詞章を唱える様



獅子の舞



剣の舞

## シンポジウムや展示・講演会で民俗芸能の魅力を深掘り！

### 面に秘められた 日本芸能史の鍵

令和七年十一月十四日(土)九日には、静岡文化芸術大学ギャラリーで特別展示「懐山のおくない舞が紡ぐ祈り」が開催され、面や衣装道具、刀剣などが紹介されました。十五日には同大学講堂で、三人の講演と「懐山のおくない」(天竜区懐山)の実演披露がありました。

同大学卒業生の古水しおりさんは「川名のひよんどりで数十分踊り続ける舞を経験した際は、本当にそこに神がいるような感覚がした。浜松にこれほど素晴らしい文化があることを誇りに思っています」と発表。

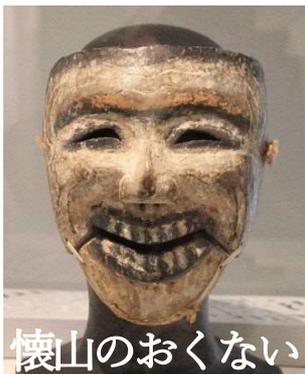
國學院大學大学院生の宮嶋隆輔さんは「おくないやひよんどりは、舞やお囃子に演劇的要素などの表現を使いながら祈りを捧げているところが全国的にも珍しい。また、能楽の中で最も神聖な演目「翁」に注目し、「能楽で既に失われている祝詞が、懐山のおくないの中で豊富に残されている」とは、日本全体の芸能の歴史

を考える上でも非常に重要」と強調しました。

浜松市秋野不矩美術館学芸員田中宏子さんは「日本刀は兵器としてだけでなく、神聖な信仰の対象で、権威や社会的身分の象徴だった」と解説。「千年前の刀でも、手入れをしていけば昔の姿が見えてくる。メンテナンスと保管の仕方が重要」と話しました。

※懐山のおくないで使用されている刀剣の詳細は、本紙第25号をご覧ください。

「懐山のおくない」の実演では、大学生等も加わった「順の舞」や「鬼の舞」などが披露され、次世代継承への取り組みの様子が伝わってきました。



翁面